

## 北京大学図書館見聞記

鳥井克之

### 略史

北京大学図書館の前身は1902年の京師大学堂蔵書楼の開設に始まる。1911年の辛亥革命以後、正式に北京大学図書館と改称された。1919年の「五四運動」前後には中国にマルクス主義を導入した李大釗が館長となり、若き毛沢東が図書館員として勤務したことがあった。1952年、全中国の大学・高等専門学校の学部学科が全面的に調整された後、北京大学図書館は旧市内中心部にあった北京大学が郊外の旧燕京大学キャンパス跡地に移転したのに伴い、旧燕京大学蔵書と他大学の一部蔵書も収蔵し、旧燕京大学図書館に設置された。文化大革命が間もなく収束しようとしている1975年、キャンパスのほぼ中心地点に新しい図書館が建設された。当時としては中国国内では最大の建築面積を有し、建築物としても最高の条件を備える図書館となった。しかし、1998年5月4日、北京大学創立百周年を記念して、北京大学図書館新館が落成した。

1975年建設の旧館は4階建てビルで簡素な校舎のような感じがしたが、1998年落成の新館は中国の伝統的建築の風格が溢れ、旧館の東壁に隣接して増築された。4階建てビル部分の上に瓦葺き2階建ての中国式家屋の大きい建造物が載っているようであり、全体としては地下2階、地上6階となっている。それ故周辺の瓦葺き3階建て校舎と調和がとれている。新館と旧館は内部が廊下により、外部は新館南北両エプロンから出ている回廊によりそれぞれ接続されている。なおこの新館は香港の著名な実業家李嘉誠氏の資金寄付により建設されたものである。



1976年完成の図書館（旧館）



新館正面（東から撮影）

### 蔵書

新館は1998年末から使用され、新旧館総建築面積は51,000平方メートルを越え、閲覧座席数は4,000余席あり、書庫は650万冊収蔵可能である。また利用者用蔵書検索システム、CD-ROM検索、オンライン情報検索のLAN接続が1,000口設置されている。

現在の蔵書数はすでに460余万冊に達し、カレント中国語雑誌3,500タイトル、外国語雑誌2,600タイトル収蔵している。この他、さらに大量の視聴覚資料およびCD-ROM、データベースなどの新しいスタイルの電子出版物を収蔵している。

とくに古典書籍（漢籍）は150万冊あり、中国全図書館中第三位であり、そのうち学術的価値のある古典版本は17万冊、貴重書版本1,000余種収蔵している。この他に古代社会の様々な側面を反映した金石文（古代文字）拓本が56,000枚あり、歴史や書道芸術研究の重要な文献である。また1949年以前の雑誌は11,547タイトル、合訂本27,650冊、新聞は605タイトル、合訂本9,644冊所蔵している。そのうち近現代思想文化や伝統文化の研究に極めて高い価値を有するものが1,000余タイトルある。この外に、辛亥革命時期、「五四」時期、中国共産党初期、抗日戦争時期、解放戦争時期に出版された刊行物は当時の歴史を研究する上での重要文献である。さらに「北京大学文庫」と命名された膨大な特別文庫がある。これは北京大学の教員や卒業生を含む国内外の多くの著名な学者の著作や関係資料を収集したものであり、百年にわたる北京大学の学術的成果を反映

しているばかりでなく、新文化運動以来の中国文化の凝縮された縮図とも言うべきものである。



古典書籍書庫（漢籍）

## 設 備

図書館のオートメ化とデジタル化建設を重要視して新館建設を機に大量の現代化された設備が投入され、図書館利用者により一層の現代化されたサービスを提供し得るようになった。現在はPULAISシステムを使用しているが、間もなく全面的にUNICORN図書館自動化集中管理システムに切り替えるとのことであった。「中国高等教育文献保障体系=China Academic Library Information System = CALIS」の管理センターが北京大学図書館に設けられ、中国の大学高等専門学校教育の図書・デジタルベースの共有化とその構築に重要な貢献を果たそうとしている。特に新館1階にあるCD-ROM・オンライン検索コーナーには百台近い端末機と大型タワー型CD-ROMドライバーとジュークボックスがあり、現代化に向けての窓口となっている。そこには100種類余りの学術CD-ROMを収蔵し、また外国のDIALOG、OCLC、UNCOVER、UMI、EBSCOなどのオンライン・データベースや電子刊行物を導入している。また同時に館内およびキャンパス内のLANによる蔵書検索以外に、国際オンライン・データベース、研究論文テーマ課題の検索などのサービスを行っている。

## 奉 仕

主楼（新館）1階にはオンライン・データベース検索、参考図書閲覧のレファレンス区域と国内外古典貴重書閲覧室が設けられている。2階から5階までは人文・社会・自然科学の図書・雑誌の開架閲覧室、台湾文献センター、アメリカ文献センターがあり、6階には研修訓練センターとコンピュータ室が設けられている。また主楼の南北両翼に設けられた独立棟は平屋建て中国風建造物で、南棟は音楽視聴

室、地下はビデオ視聴室、北棟は学術会議場、地下は多機能ホールになっている。主楼の西にある旧館1階にメインカウンター、3階に一般閲覧室、4階には新聞、文学・芸術定期刊行物閲覧室がそれぞれある。なお旧館南側は学生自習区域になっており、利用者に快適で静かな学習環境を提供している。館全体としては全部で17閲覧室（区域）があり、館全体の配置は合理的、機能的であり、メイン・インフォメーション・レファレンス各カウンターを通じて閲覧、貸出、資料検索、データ提供、利用者研修、他図書館との相互利用、文献印刷・コピー・装丁など多種多様なサービスを行っている。

なお図書館の事務機構には収書部、目録部、雑誌部、閲覧部、情報レファレンス部、貴重書部、視聴覚資料室、文献（印刷・複製・装丁）奉仕部、館長事務室などの業務および行政部門がある。



一般開架閲覧室

## 国際交流

北京大学が世界各国の大学や研究機構との学術交流と共同研究を拡大発展させるという基本的活動方針の一翼を担って、北京大学図書館はこれまでの文化交流と友好往来の基盤を拡大して、多方位、多形態の対外交流活動を展開している。現在、外国の500余りの図書館、大学、研究機構と定期的な資料交換および図書館間相互貸借関係を結んでいる。また国内外の多くの機構、個人の貴重な蔵書の寄贈により図書館の蔵書を豊富にしている。この他、国際化に適応しうる人材を養成し、対外交流を深めるために、北京大学図書館は外国図書館関係者を受け入れ、図書館業務の共同研修や図書館学の共同研究を行うと同時に、経常的に図書館員を外国の図書館に派遣して研修・視察を行い、あるいは相手方の図書館と専門業務領域における協力関係を樹立している。

今や北京大学図書館は国際図書館協会联合会（IFLA）、中国図書館協会及び中国科学技術情報学会構成メンバーとなり、中国と世界の図書情報事業

の発展のためにそれ相応の貢献をなしている。

以上は昨年9月前半、北京大学外国語学院日本語学部において「中国語構文分析法に基づく中文日訳」について集中講義したとき、L女史の案内により北京大学図書館を見学したときの見聞とその時に頂戴した資料パンフレットに基づいて書いたものである。L女史は私が1979年度の1年間、現在学部長になっている先生や所謂D(含)教授になっておられる先生と書いた日本語教科書の原稿を次から次へとタイプ印刷してくれた人であったが、現在は北京大学国際交流センターの中堅幹部になっておられた。

新館の建つ前、そこには大きい毛沢東の立像を中心とする広場であった。芝生と舗装された幅広い通路が旧館玄関へと通じていた。その通路には麦秋の頃ともなれば北京大学学生が勤労奉仕で刈り入れた麦が一面に干され、1979年9月13日夜、全国体育運動大会の聖火リレー中継式がそこで挙行され、4階南東角に松下電器寄贈の視聴覚教材制作室が開設されたことなどが思い起こされる。また旧館1階玄関にあった鄧小平題字の「北京大学図書館」の額は今や新館6階の軒下に掲げられている。

写真を見ても感じられるように、旧館は校舍然としていたが、新館は中国人が素晴らしい建造物等を誉めるときの常套語句「宏偉壯麗(雄大で壯麗だ)」そのものである。エントランスホールは大理石が敷き詰められ、新館全体の内装は旧館とは比較できないほど立派である。見学当日たまたま新入生の図書



エントランス・ホール

館案内と遭遇したので、しばらく行動を共にしたが、案内説明の度に賛嘆の声が起こっていた。学年始めにも関わらず、閲覧室はもちろんのこと自習室も満席に近かった。それは以前と同様であった。全寮制で、1室4乃至8人であれば、図書館は絶好の勉強場所であるからだ。それ故に上述したように旧館南側の閲覧室をすべて「自習区域」にして「快適で静かな学習環境」を提供しているのである。

21年前、私は書庫入庫を申し出たことがあったが、専任教員ですら許可されていないとのことで、入庫できなかった。現在も蔵書検索端末機及び北京大学キャンパスLANによる検索が可能になったので、司書以外は原則として入庫不許可の方針を貫徹しているとのことであった。また21年前、教科書原稿4セットを図書館にある電子複写機でコピーすることを願い出たところ、経済的な理由によりカーボン複写紙で毎回コピーしたが、今では国産電子複写機が出現したことにより、現在では多くの学生が電子複写コピーを利用するので文献奉仕部が音をあげるほど大忙しになったとのことであった。

21年前は中国は勿論のこと、日本でも図書館でのパソコン利用はなかった。しかし、今では上述のように北京大学キャンパスにLANが設けられ、図書館利用者が自由にパソコンを利用して検索し、情報を取得している。それをさらに支援するために「図書館“一小時(時間)講座”系列活動」と称する教職員と学生を対象とするパソコン教室が開講されて、SocioFile, ERIC, SSCI, LISA, BookReview, OCLC, UNCOVER, PQDDCA, BA, INSPEC, GeoRef, Math Sci, Pro Quest Digital Dissertation, Cambridge Science Abstract, MEDLINE, Genome Database, SCI, EI, ISTP, A&HCI, ABI, Academic Research Library, Academic Search Elite, Business Source Premier, Lexis-Nexis Academic Universe, Elsevier等のソフト活用に関する講義と実習が新館E101室(CD-ROM検索室)で行われていた。

(外国語教育研究機構教授 とりい かつゆき)